

1 2

【国際教養学部】

小論文問題

2022(令和4)年度

【注意事項】

1. この問題冊子は「小論文」である。
2. 試験時間は60分である。
3. 試験開始の合図まで、この問題冊子を開いてはいけない。ただし、表紙はあらかじめよく読んでおくこと。
4. 試験開始後すぐに、以下の5および6に記載されていることを確認すること。
5. この問題冊子の印刷は1ページから4ページまでである。
6. 解答用紙は問題冊子中央に1枚はさみこんである。
7. 問題冊子に落丁、乱丁、印刷不鮮明な箇所等があった場合および解答用紙がない場合は、手をあげて監督者に申し出ること。
8. 試験開始後、解答用紙の所定の欄に、受験番号と氏名を記入すること。
(受験番号は2箇所、氏名は1箇所)
9. 解答は必ず解答用紙の指定された箇所に記入すること。解答用紙の裏面に記入してはいけない。
10. 問題番号に対応した解答欄に解答していない場合は、採点されない場合もあるので注意すること。
11. 解答する字数に指定がある場合は、句読点も1字として数えること。英数字を記入する場合は、1字分のマス目に2文字まで記入してよい。
12. 問題冊子の中の白紙部分は下書き等に使用してよい。
13. 解答用紙を切り離したり、持ち帰ってはいけない。
14. 試験終了時刻まで退室を認めない。試験中の気分不快やトイレ等、やむを得ない場合には、手をあげて監督者を呼び、指示に従うこと。
15. 試験終了後は問題冊子を持ち帰ること。



〔問題〕 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

言語は世界的に消滅傾向にある。これが現実なのだ。だが、言語の消滅はそんなに悪いことなのだろうか？ 数千もの言語が存在していると、コミュニケーションが阻害されるし、言語が違えば人々のあいだの衝突も起きやすくなるのではないか？ 現実には、言語の消滅は促されるべきものなのだろうか。実際、イギリスではBBCが、消滅しつつある言語の価値を擁護する番組を放送したあと、そのような意見が視聴者の意見として同局に殺到した。たとえば、つぎのようなコメントである。

「この放送は感傷的なたわごとだ！ 言語が絶滅するのは、その言語が、継続と発展をつづけるために必要な知的、文化的、社会的な活力を伝えることができない瀕死状態ひんしの社会の表現手段だからだ」

「ばかばかしい内容だ。言語の目的は意思疎通であり、その言語の言葉を話す人がいなければ、その言語には目的が存在しない。そんな言語を学ぶのは、クリンゴン語(『スター・トレック』)に出てくる宇宙人の言語)を学ぶようなものだ」

「7000 言語が存在している状況が役に立つのは、言語学者にとってだけである。言語が違えば人は分裂する。共通であれば団結する。使用言語は少なければ少ないほどいい」

「人類はつながる必要がある。そうやって前進するからだ。お互いに意思疎通ができないような部族にわかれていても意味がない。五つの言語があるとしても、それが何になる？ どの言語も記録して、学べるものは学んで、あとは、しかるべき歴史に委ねてしまえばいい。世界はひとつ、人類もひとつ、共通言語もひとつ、目的もひとつ、そうなれば、人類もおそらく仲よくやっていける」

「私にいわせれば、7000 言語のうち 6990 が余分だ。消滅させてしまえ」

世界の言語の消滅を正当化するようなコメントをBBCに寄せた視聴者と同じ意見を持つ人々が世の中に存在するのは、おもにつぎのふたつの考えかたがあるからである。そのひとつは、つぎの一文で言い表せる——「お互いにコミュニケーションを取るためには、共通言語が必要である」^(A)たしかにそれはそのとおりである。異なる人々がお互いにコミュニケーションを取るには、何らかの共通言語がたしかに必要である。しかし少数派の言語をなくす必要はない。たんに少数派の言語を話す人々が、多数派の言語を学んで二言語話者になる必要があるだけの話である。たとえば、デンマークは世界で七番目に豊かな国であり、国民の生活満足度が世界でもっとも高い国のひとつである。それでも、デンマーク語を話すのは500万人のデンマーク人だけなのである。というのも、ほぼすべてのデンマーク人が英語やその他のヨーロッパの言語も流暢りゅうちやうに話せるからであり、それらの言語を仕事でも使っているからである。デンマーク人は社会が豊かで、デンマーク人であることを幸せに思っている。それは、彼らがデンマーク語を話すからである。そして、もし、デンマーク人がデンマーク語と英語の二言語を話せるようになりたいと思うのであれば、それは彼ら自身の問題であり、選択である。同様に、もしナバホ族の先住民がナバホ語と英語の二言語話者になりたい

と思うのであれば、それも彼ら自身の問題であり選択である。ナバホ族は、他のアメリカ人にナバホ語を学ぶように要求したりしないし、学んでほしいとも思っていない。

もうひとつのおもな理由は、多言語が存在する結果、他言語の話者を異邦人とみなす対立感情が起き、それが民族間の対立や武力抗争の原因となるという考えかたがあるからである。そういう考えを持つ人々は、今日、多くの国々において武力抗争がみられる場所は、言語境界線であるという主張をする。そのような主張の裏には、多言語の有用性が何であれ、地球上から殺し合いをなくすために多言語状態を世界から解消することは、しかたのない代償^(B)なのだという考えかたなのである。クルド民族がたんにトルコ語やアラビア語を話すようになれば、スリランカのタミル民族がシンハラ語を話すことに同意すれば、ケベック州のフランス人やアメリカのヒスパニックが英語を話すようになりさえすれば、この世界はもっと平和な場所になるのではないだろうか、という思いがあるのである。

これは一見、説得力のある主張である。しかし、この主張の暗黙の前提である、単一言語がユートピアをもたらすという考えは正しくない。言語の相違は、人々が対立する構図の最大原因ではないからである。偏見を持つ人は、どんな違いにも難癖をつけ、他者を嫌悪するものなのである。彼らは、宗教や政治、民族、衣服の違いなど、いかなる違いも感じ取る。第二次世界大戦終結以降、ヨーロッパで起きた最悪の大量虐殺は、旧ユーゴスラビアにおいて起こっている。それは、東方正教会のセルビア人とモンテネグロ人(その後分裂した)、カトリックのクロアチア人、イスラム教のボスニア人の三者がお互いを殺し合った紛争だった。三者ともに、セルビア・クロアチア語という同じ言語を話していたにもかかわらずである。第二次世界大戦終結以降、アフリカで起きた最悪の大量虐殺は、1994年にルワンダで起こっている。このルワンダ虐殺では、フツ族が100万人近いツチ族を殺害し、ルワンダ内のトゥワ族の大半を殺害している。しかし、これらの部族の人々はすべて、ルワンダ語を話していたのである。第二次世界大戦終結以降、世界で起こったもっとも悲惨な虐殺は、カンボジアで起こっている。このポル・ポトの独裁下で起こったカンボジア人大量虐殺では、クメール語を話すカンボジア人が、同じくクメール語を話す別のカンボジア人たちを約200万人も殺害したのである。そして、人類史上、最悪の虐殺は、スターリン政権下のロシアで起こっている。このときロシア人は、政治的信条が異なるという理由で、数千万人にのぼる人々を殺害している。そして、それらの犠牲者のほとんどはロシア語を話す人々だった。

少数派は、平和を促進するために、みずからの言語を捨てて多数派の言語を話すべきである。このように考える人は、少数派はみずからの宗教の自由や民族の独立、政治的信条の自由を捨てて平和を促進するべきであるとも考えるのだろうか。もし、宗教の自由や民族の独立、政治的信条の自由は、人間としての固有の権利であると考えながら、言語の自由はそうではないとする人は、クルド民族やフランス系カナダ人に対する自身の見解の一貫性のなさをどのように説明するのだろうか。大量虐殺の事例は、スターリンやポル・ポト、ルワンダ、旧ユーゴスラビアの他にも数多く存在する。そして、これらの事例は、単一言語主義が平和を得るための手段にはならないことをわれわれに警告している。

人間はだれしも、言語や宗教、民族性、政治信条において異なり得る。それが現実であるとすれば、抑圧や大量殺害に代わり得る唯一の代替案は、人々が相互に寛容になってともに暮らせるか否かにかかっている。これは根拠のない希望というわけではない。過去に宗教をめぐる戦争が各地で起きた。しかし、アメリカやドイツ、インドネシア、その他多くの国で異なる宗教を信じる人々が^{へいわり}平和裡に共存している。同様に言語的に寛容になり、異なる言語を話す人々を受け入れ、折り合いをつけて暮らしていけることに気づいた国も多い。たとえば、オランダではオランダ語とフリジア語の二言語が、ニュージーランドでは英語とマオリ語の二言語が話されている。フィンランドではフィンランド語、スウェーデン語、ラップ語の三言語が、スイスではドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語の四言語が話されている。そして、ザンビアでは43の言語が、エチオピアでは85の言語が、タンザニアでは128の言語が、そしてカメルーンでは286の異なる言語が話されている。私はザンビアに出かけたとき、ある高校を訪ねたことがある。そのとき、ひとりの生徒から質問された。「あなたはアメリカではどの部族に属しているんですか？」そして、その後は、生徒のひとりひとりが、にこにこしながら、それぞれの部族の言語を私に教えてくれた。その小さなクラスには七つの言語が集まっていた。そして、自分の出自を恥ずかしそうにしている生徒も、他部族の人間を恐れているような生徒も、ひとりとしていなかったのである。殺し合いをはじめるといったような雰囲気も見受けられなかったのである。

たしかに、言語の存続に必然的に有害なものは何もない。努力が必要とされるのは、二言語話者になろうとする少数派の言語の話者だけである。しかし、その努力に耐えて二言語話者になるか否かの問題でさえ、少数派の話者が自分でどうするかを決めればよだけの話である。それでは、言語の多様性はどのようなのだろうか。この多様性を維持する利点は実際に存在するのだろうか。^(C)なぜわれわれは、北京語、スペイン語、英語、アラビア語、ヒンディ語という世界の上位五つの言語に、世界の言語を絞ってしまわないのだろうか。もし、あなたが英語話者で、この最後の問いに「そうだ！」と相づちを打ちそうになっていたなら、それはつぎのくだりを読んでからにしてほしい。つまり、世界の言語を絞り込むという議論を一步先に進め、少数派の言語は多数派の言語に道を譲るべきであると考えるのであれば、われわれ英語話者も世界最大の言語、北京語を採用し、英語は死滅させるというのが論理的な結論になるのである。

(出典 ジャレド・ダイヤモンド、倉骨彰訳、『昨日までの世界——文明の源流と人類の未来(上・下)』、日本経済新聞出版社、2013年。なお、出題の都合上、原文を一部改変した部分がある。)

(注) スタートレック：アメリカで制作されたSF映画のタイトル。

- (1) 下線部 (A) の考えかたについて、それが世界の言語の消滅を促すことを正当化しないと筆者が考えている理由は何か。80 字以内で答えなさい。
- (2) 下線部 (B) の考えかたの代わりとして、筆者が本文中で提案しているのは、どのような考えかたか。150 字以内で答えなさい。
- (3) 下線部 (C) での筆者の問いかけに対して、あなた自身はどのように答えますか。理由も含めて 300 字以内で述べなさい。